

[成果情報名]野生シカの一部飼育管理技術

[要約]捕獲されたニホンジカを一部飼育する際には、導入から約2週間はシカを刺激しないよう注意が必要であると共に、植物生育量の確保や隠れ場所の設置が必要である。また、制限給餌を連日行うことで定時にシカを集めることが可能である。

[担当]酪農試・乳肉用牛科・土橋 宏司

[分類]技術・参考

[課題の要請元]

総合理工学研究機構

[背景・ねらい]

山梨県ではニホンジカ(以下シカ)の個体数増加に伴う農林業被害が深刻な問題となっており、各種対策の強化が進められている。このような中、総合理工学研究機構では貴重植物種への影響の把握・解析や保護対策及び個体数管理のための捕獲および活用方法等について検討している。当场では、捕獲されたシカの飼育状況下における馴化状況については不明な点が多く、死亡率が高いことから、シカの行動生理や飼育環境への馴化状況について調査し、食用への活用も視野に入れた一部飼育技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 捕獲されたシカは、飼育施設導入後約1週間はフェンスへの衝突や走行といった逃避行動が多く、主に野草等の自生植物を採食する。給与飼料の採食開始までには約2週間を要する。(図1)
2. 飼育施設内における滞在割合は、導入直後は土手や高台で高く、時間の経過に伴い行動範囲が広がる。特に、林での滞在割合は観察期間中大幅に増減することがなく、移動の際には林を経由することから、飼育施設の設置に際してはシカが隠れやすい場所の設置が必要である。(図2)
3. シカの人に対する警戒心は非常に高く、詳細な個体観察が可能な距離に接近するまでには1ヶ月以上の時間を要する。(図3)
4. 採食頻度は、制限給餌の条件下では給餌直後の1時間に集中しており、定時にシカを集めることが可能である。(図4)

[成果の活用上の留意点]

1. 給与飼料を採食するまでの飼料として、施設内に一定量の牧草や野草等の生育を確保しておくこと。
2. シカに接近する場合は、飼育開始から1ヶ月程度までは20m以上、それ以降で接近距離が短縮していても10m以上の距離を保つこと。

[期待される効果]

給餌時間を調整し、シカを定時に誘因することで効率的な捕獲に応用が可能である。また、飼育環境への馴化状況は一部飼育を行う際の基礎的データとして、今後の個体数管理等に活用できる。

[具体的データ]

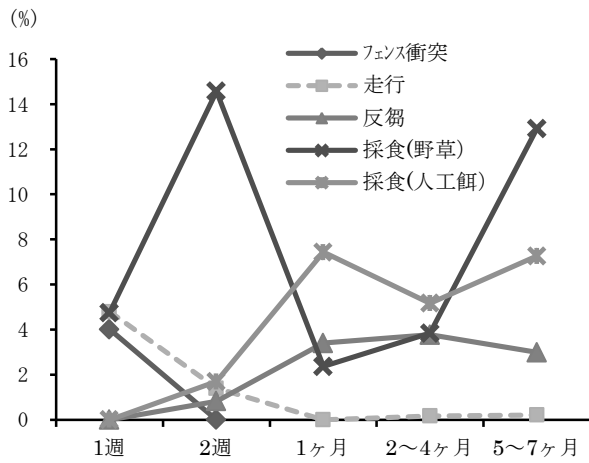


図1 飼育施設内におけるシカの行動割合
(ニホンジカ メス 4頭 H23年10月捕獲)

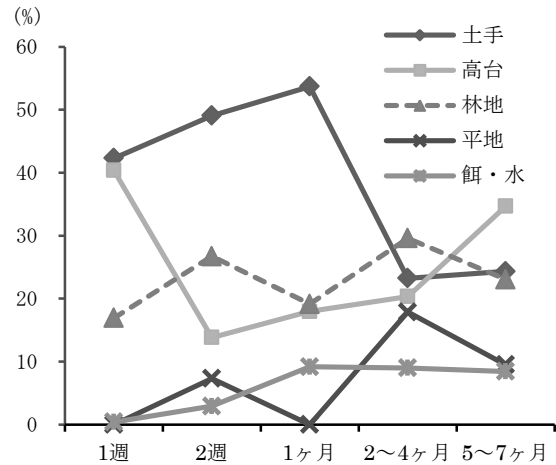


図2 飼育施設内におけるシカの滞在割合

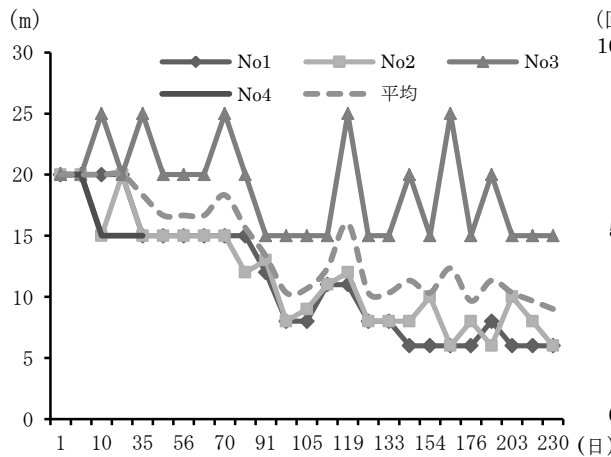


図3 人に対する接近距離の推移

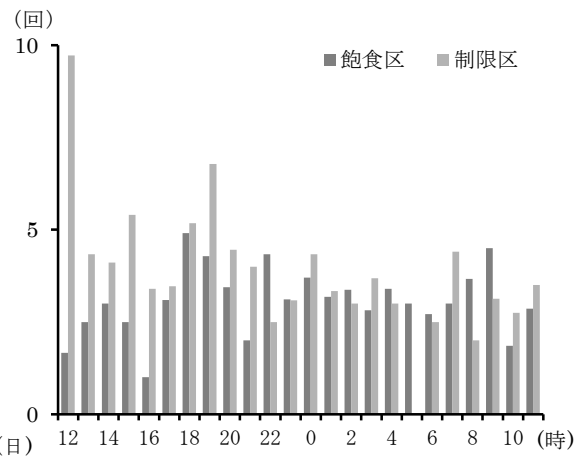


図4 給餌条件の違いによる採食頻度の変化

[その他]

研究課題名：野生ジカの一時飼育管理技術の検討
 予算区分：総合理工学研究機構（県単）
 研究期間：2010～2012年度
 研究担当者：土橋宏司、鈴木希伊、神藤 学